［有明抄］（2018.5.12）

○家族に宛てて、思い出や感謝の気持ちを手紙に書いたり俳句を詠んだりしよう。

へ	
へ	
へ	

年　　組　　号（氏名）

○今日の有明抄にタイトルをつけてみよう。

有明抄

ことしは作家井伏鱒二の生誕120年にあたる。『山椒魚』『黒い雨』といった代表作はもちろんだが、釣りや旅のエッセーも多い。その随筆集「人と人影」（講談社）に『おふくろ』と題した作品がある。一部を紹介する◆―「ますじ」とお袋が云った。「お前、東京で小説を書いとるそうなが、何を見て書いとるんか」「字を間違わんように書かんといけんが」◆鱒二は2、3年に一度、田舎に立ち寄るが、いつも同じ愚痴を聞かされる。母親も説教ばかりしてもと思い、鱒二の義姉に酒を1本つけるよう頼む。しかし、酒飲みの伜に酒を飲ませたいお袋は、「飲めるんじゃもの。もう一つだけなら飲んでもよかろうが」と、酒を見るのも嫌な義姉に遠慮しながら、また燗を頼む◆帰郷した息子を思う気持ちと嫁への気兼ね。なんともいえない母親の心の機微を感じさせるシーンだ。井伏鱒二はこの随筆を発表した6年後、文化勲章を受ける。その夜、郷里のお袋さんから電話があり、親しく話をしたという◆あすは「母の日」。プレゼントや花を用意する人も多かろう。久しぶりに親子水いらずの言葉を交わしたい。一方で、感謝の気持ちを伝えようにも、もう他界してしまった母をしのぶ人もいよう。わずか3歳で母親と死別した小林一茶の句がある。〈亡き母や海見る度に見る度に〉（丸）

○井伏鱒二の作品を読んで感想を書いてみよう。

35　30　25　20　15　10　5